

2025年(令和7年)4月21日

病院長からの一言
未来に向けた
2つのプロジェクト

弘前大学医学部
附属病院長 袴田 健一



日頃より、患者さんに寄り添い、安全で質の高い医療を提供するために尽力いただいていることに、心より感謝申し上げます。

当院では、地域社会へ持続可能な形で最良の医療を提供できる環境を整えるため、各職種の増員を進めてきました。そして、4月からは新たに多くの方が入社されました。病院は緊張度の高い職場であり、職員間の円滑なコミュニケーションを通じてストレスを軽減し、新たな仲間が一日でも早く職場環境に慣れることができるよう、皆様の温かい支援をお願いいたします。

さて、新年度から、当院の未来を見据えた二つの大型プロジェクトが始動します。第一は病院再開発です。第二病棟の機能移行と当院の医療体制の強化を目的としています。先行整備された入院棟東と同様に災害に強い構造を備えるとともに、有事には災害拠点として、平時には職員が集える施設としての機能を持たせることを検討しています。また、リハビリテーション部門の機能拡充も計画されており、これらの取り組みは、患者さん、職員をはじめ全ての病院利用者のWell-beingの向上に資すると期待されますし、地域中核・特色ある研究大学強化促進事業(J-PEAKS)に採択された弘前大学が目指す方向性にも合致するものです。なお、病棟再開発に先行し、経営基盤の強化を目的とした手術部の拡充整備を進めます。

現時点では、外来診療棟側への拡充を検討しています。第二は、次期病院情報システムの更新に向けた準備です。利便性・共有性の高い病院情報システムは全ての職種の業務改善の鍵です。また、連携する部門別システムのセキュリティ対策強化、病院情報システム内のデータ利活用の促進など、多岐にわたる課題に対応していく必要があります。これらの課題を整理し、組織として系統的に対応するために執行部・各部署長からなる病院情報管理システム委員会を立ち上げ、全診療科・全部門が関与する体制を整えました。今後3年間をかけて仕様を見直し、5年後の更新に向けて準備を進めてまいります。

新年度は、これらの大型プロジェクトに対応するため副病院長を4名体制とし、執行部の強化を図りました。病院再開発担当の副病院長には、業務改善担当病院長補佐の漆館聡志教授に就任いただき、病院情報システムの整備とDX推進を加速させるために、松坂方士教授に新たに病院長補佐に就任いただきました。また、長尾麻紀子新看護部長には、看護担当病院長補佐として執行部に加わっていただきました。

今後も、病院全体で力を合わせ、地域に信頼される医療機関としての発展を目指してまいります。職員の皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

各診療科等の紹介 【周産母子センター】

当センターは2000年4月の附属病院中央診療棟共用開始に伴い、開設されました。陣痛室、分娩室、回復室が一体となった個室であるLDRが2室、緊急時の手術に対応可能な特殊分娩室が1室設置され、新生児については集中治療室(NICU)6床、回復室(GCU)10床で運用しております。当センターは県内および秋田県北部におけるハイリスク妊産婦、新生児の受け入れの中心的役割を担っており、NICUについては常に満床に近い状況にあります。

令和6年の分娩数は200件(209人)で、全国的な少子化に伴い年々減少しています。一方で、出産年齢の高齢化や不妊治療の進歩などによりハイリスク妊娠は増加しており、母体合併症や胎児合併症を有するハイリスク妊婦が全体の9割以上を占めています。分娩様式は、帝王切開が約3分の1を占め、多発筋腫合併妊娠や癒着胎盤等の影響により産後過多出血の発生が増加しております。産科危機的出血のリスクが高い症例には、放射線科・麻酔科・

小児科と合同で術前ミーティングを行い、胎児疾患には小児科・小児外科と分娩前カンファレンスを実施しています。

当センターは日本周産期・新生児医学会の母体胎児部門認定施設、新生児部門補完施設となっており、多くの周産期専門医を輩出してまいりました。胎児心エコー技術の普及により出生前診断例が増加し、日本胎児心臓病学会の専門施設にも指定され、当院小児科に「胎児心エコー外来」も開設されました。また、当院は青森県唯一の「妊娠と薬」外来拠点病院であり、国立成育医療研究センターと連携し、妊婦に最新の医薬品情報を提供しています。



2012年より産科危機的出血など妊産婦への対応について研修する「青森周産期救急セミナー」を毎年開催し、また、新生児蘇生法(NCPR)講習会も定期的に開催することにより、周産期医療の質の向上と医療安全の確保に努めております。

引き続き、ご指導ご支援賜りますようよろしくお願い申し上げます。

(周産母子センター 講師 伊東麻美)

JRAT 厚生労働省表彰

この度、令和6年能登半島地震におけるJRAT活動に対し、令和6年7月1日に厚生労働省より感謝状をいただきました。南塘だより第113号および115号において、青森県災害リハビリテーション連絡協議会(青い森JRAT)派遣に関するご報告および弘前大学表彰に関して記載させていただいております。今回の令和6年能登半島地震では、計3回延べ11名の隊員が派遣されております。本震災では全国の地域JRATよりJRAT隊員が被災地へ派遣されており、派遣が行われたすべての地域JRATに感謝状が贈られております。

今回の震災をきっかけにJRATが全国的にも認知されてきており、令和6年2月28日には防災基本計画にJRATの名称が明記されることとなりました。このことは国として災害時におけるJRATの重要性を認識していただいていることを意味していると感じております。また、令和7年3月27日には青森県と青い森JRATで協定が締結されることとなり、本県においても災害医療におけるJRATの役割が高まってきております。このように、JRATの必要性は増加する一方で課題も多いことが現状です。最も重要な課題は人材育成です。今回の震災では延

べ11名の隊員を派遣しましたが、実際に青森県内での災害発生を想定すると十分な人数には到底及びません。また、各地域で一定水準の活動を継続的に実施するためには、全県レベルでの研修会を継続的に実施し、人材育成を行うことが急務となります。このような問題解決のため、今後は全県レベルでの研修会を年数回実施する予定です。

最後になりましたが、今回の派遣に関して多大なる配慮をいただきました袴田健一病院長をはじめ、リハビリテーション部の津田部長、リハビリテーション部のスタッフには感謝申し上げます。今後も病院関係者の方にはお世話になることが多いと思いますが、JRAT活動に関してご支援をいただけると幸いです。(リハビリテーション部 療法士長 西村信哉)



令和7年度体制スタート!

今年度は、副病院長に呼吸器内科学講座 田坂定智教授、救急災害・総合診療医学講座 花田裕之教授、産科婦人科学講座 横山良仁教授、形成外科学講座 漆館聡志教授が就任しました。また、病院長補佐に消化器血液免疫内科学講座 櫻庭裕丈教授、放射線診断学講座 掛田伸吾教授、脳神経外科学講座 齊藤敦志教授、輸血・再生医学講座 玉井佳子教授、放射線腫瘍学講座 青木昌彦教授、医療情報学講座 松坂方士教授、薬剤学講座 新岡丈典教授、看護部 長尾麻紀子看護部長が就任しました。(総務課)



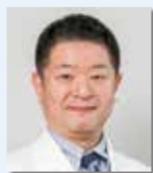
副病院長 田坂 定智 副病院長 花田 裕之 副病院長 横山 良仁 副病院長 漆館 聡志 病院長補佐 櫻庭 裕丈 病院長補佐 掛田 伸吾 病院長補佐 齊藤 敦志 病院長補佐 玉井 佳子 病院長補佐 青木 昌彦 病院長補佐 松坂 方士 病院長補佐 新岡 丈典 病院長補佐 長尾麻紀子
呼吸器内科学講座 救急災害 総合診療学講座 産科婦人科学講座 形成外科学講座 消化器血液免疫内科学講座 放射線診断学講座 脳神経外科学講座 輸血・再生医学講座 放射線治療学講座 医療情報学講座 薬剤学講座 看護部 看護部長

みなさんご存じのとおり、弘前大学は昨年「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業：J-PEAKS」に採択されました。これにより本学は5年間で最大55億円の支援を受け、国内外の大学などと連携し「グローバルWell-being(心身の健康と幸福)研究」で世界トップレベルの研究拠点を目指します。この目標を達成するために必要なものは何でしょうか?私はその1つとして、これに取り組んで行く職員のみなさん自身のWell-beingが不可欠ではないかと思ひます。

私は昨年、袴田病院長より勤務環境改善担当を命ぜられ、働きやすい環境作りに取り組んでいるところです。まずは職員のみなさんの現状を把握するため、昨年12月に職員満足度調査を行いました。アンケートに対して多くの職員のみなさんからのご回答をいただき、この場を借りてご協力に感謝申し上げます。先日その集計が終了しましたので、調査結果を簡単にご報告いたします。まず「仕事のやりがいや、充実感」「仕事の量や質」に関する満足度に関する設問では「非常にそう思う」

先憂後楽

職員のWell-being



副病院長 漆館聡志

「そう思う」が約7~9割と概ね良好な結果が得られました。多くの職員のみなさんが、やりがいと充実感を持って勤務されているということは、当院にとって非常に喜ばしいことです。一方で給与に関しては「非常に不満」「不満」が57%と半数を超えており、この影響もあってか「現在の労働条件に満足しているか」という設問では「非常にそう思う」「そう思う」が50%にとどまるという結果でした。給与面では公務員の賃上げに関して人事院・政府でも検討されているところです。また総

合的な満足度を上げるためには、働き方改革と連動した効果的なタスクシフト、DX化による業務の効率化、ダイバーシティ&インクルージョン(D&I)などを速やかに推進していくことが重要と考えており、これらに対応すべく各部署で検討を重ねているところです。今後も引き続き職員のみなさんのWell-beingを守り、労働条件の満足度を上げるため勤務環境改善に取り組んで参りますので、ご協力・ご意見を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

## World Diabetes Day (世界糖尿病デー) イベントを開催

「11月14日」は、World Diabetes Day (WDD: 世界糖尿病デー) です。

この日はインスリン発見者のパンティング博士の誕生日です。毎年、糖尿病の予防や治療、療養を喚起するため、各地で有名な建造物をブルーにライトアップし、街頭での啓発活動が行われます。

弘前では、コロナ禍で2020年以降イベントを休止していましたが、「知れば怖くない糖尿病」をテーマとし、様々なイベントを行いました。

大学病院内では、患者さんやそのご家族にも糖尿病について正しく知ってもらうため、当科の医師と糖尿病診療に携わる看護師さん達の工夫が詰まった、「世界糖尿病デー」ブースを大学病院入り口のスペースに設置しました。「世界糖尿病デー」ブースでは、患者さんやご家族、糖尿病療養に関わるスタッフなどのコメント付箋を



玄関前ブース



イベント会場



WDD集合写真

貼り付けたブルーサークルを作成しました。

また、弘前市職員の方々のご協力を得て、11月11日(月)～14日(木)、旧第五十九銀行本店本館(青森銀行記念館)をブルーにライトアップしました。レトロでおしゃれな青森銀行記念館が青く照らされる光景はとても幻想的でした。

WDD当日は、土手町コミュニケーションプラザにて、当科医師のほか、医療スタッフ、医学部学生さんの協力を得て、血圧測定や健康相談、体組成測定、野菜の摂取量評価、簡易血糖測定など健康チェックを行いました。参加者からは、自身の筋肉量や体脂肪量の評価ができたこと、実際の血糖値

や野菜の摂取状況を知ることができたことは、とても有意義だったと喜んでいただけました。終了後、市民公開講座として、当科講師の田辺壽太郎医師、当院栄養管理部の藤田裕恵管理栄養士、近隣で開業されている理学療法士ご夫妻に講演を担当してもらいました。糖尿病総論から始まり、食事療法のウソ・ホント、運動療法として歩くための足のメンテナンス方法の実演と続き、非常に充実した内容でした。

イベント参加者は総勢約60名と盛況でした。一般市民の方々と交流ができ、微力ながら糖尿病啓発の一助を担うことができたイベントだったと思います。

(内分泌内科・糖尿病代謝内科 准教授 柳町 幸)

## 「家庭でできる看護ケア教室」を開催

令和6年11月7日、看護部主催による市民公開講座「家庭でできる看護ケア教室」を開催し、16名の方に参加いただきました。今年は「冬にはやる感染症と感染対策～しっかり対策、防ごう感染症～」をテーマに、感染管理認定看護師による講義と演習を行いました。

新型コロナウイルス感染症が5類感染症となってから一年以上が経過し、感染流行期には実施されていた感染対策が徐々に行われなくなってきています。加えて冬は、新型コロナウイルス感染症に限らず、その他の感染症が流行する季節でもあります。そこで講義では、感染対策、特に手指衛生の大切さを再認識してもらうため、動画や写真を用いて解りやすい内容で説明しました。また、冬に流行する感染症の病態や、家庭でもできる感染を防ぐためのポイントを整理して伝えました。

演習では、着色剤を用いた手指



消毒や、蛍光塗料を用いた手洗いの実演を行いました。実際にご自身の手指衛生がどのように行われているかを可視化したことで、楽しみながら体験されていました。参加者からは、「今までの手洗いが粗末だったとわかった」「手洗いや消毒の練習ができてよかった」「楽しく勉強ができた」等の感想をいただきました。

今後も感染症の流行は繰り返す起こると思いますが、市民一人一人が「感染しない、感染させない、拡げない」ための対策を家庭から広げていけるよう、感染対策を学ぶ場を提供し、微力ながら地域貢献ができればと思います。

(感染管理認定看護師 木村俊幸)

## 令和6年度「治療と仕事の両立支援セミナー」を開催して

近年の人口減少に伴う労働力不足を背景に、「治療と仕事の両立支援」は、雇用を維持したい事業者と治療をしながら仕事を続けたいと考える従業員の双方を支援する制度として注目されています。疾患を理由に休業や退職を余儀なくされる患者数は、メンタルヘルスやがんに次いで循環器病が多いことから、脳卒中・心臓病等総合支援センターでは開設当初から両立支援事業に注力してきました。その一環として、「治療と仕事の両立支援セミナー」を、令和6年11月23日青森市において青森産業保健総合支援センターとの共催で開催しました。

「脳卒中や心臓病の治療と仕事の両立を考える」をテーマに、県内の事業者・人事労務担当者、産業保健スタッフ、両立支援コーディネーター等を対象として、各分野の先生方から講演をいただきました。産業保健分野から、青森

産業保健総合支援センター長の中路重之先生より「青森県の労働者の健康が短命県に及ぼす影響」について、本県と他県の健康関連指標の比較を交え、県内での健康づくりの取り組み事例を紹介いただきました。次いで医療分野から、弘前大学大学院医学研究科むつ下北地域医療学講座講師の石田祐司先生より「不整脈治療を受けている方が安全に働いてもらうために」と題し、心臓デバイスが入った方における労働環境上の配慮について講演いただきました。最後に、脳卒中と向き合う活動団体OneFeels代表の佐々木三之氏より「病気を抱えながら働き続けるために」と題し、脳出血の闘病体験をもとに、仕事の中で得られる喜びや価値、社会的役割が、療養を続けるうえで心の拠り所となることをお話いただきました。

今回のセミナーでは、両立支援分野の専門職と支援を受ける当事



者が参集し意見交換が行われ、両立支援に関する現状と課題を共有することができました。今後も青森県及び青森産業保健総合支援センターをはじめ関係各所と密接に連携をとり、疾患を有しながら安心して仕事を続けられる環境づくりに向けて事業展開を進めて参ります。

(センター員 社会福祉士 佐藤誠人)

## 花\*花をお迎えして院内コンサートを開催

本院では11月28日、入院患者さん限定の院内コンサート～花\*花をお迎えして～を開催しました。ゲストに「あ～よかった」のヒット曲で知られる花\*花をお迎えし、ラジオ番組の公開録音も兼ねての開催となりました。

コンサートでは「あ～よかった」のほか、NHKみんなのうたでも流れていた「赤い自転車」、この弘前に合わせて「林檎の木の下で」など7曲を歌い、曲の合間には軽快なおしゃべりでご自身の闘病体験をお話するなど、入院



患者さんを勇気づけてくれました。最後には本院に展示している津軽塗ピアノで「tasokare」をお二人で連弾し、会場に集まった入院患者さんや職員約150人から大きな拍手が贈られていました。

(医事課)

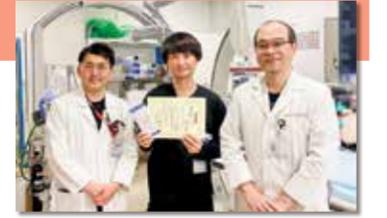
## 優秀演題賞を受賞して

2024年10月12日に開催された第12回日本EP・アブレーション技術研究会において、「クライオバルーンアブレーション中のCMAPモニタリングにおける下大静脈挿入用電極カテーテルBeeATの至適記録電極に関する検討」を発表し、優秀演題賞を受

賞しましたのでご報告いたします。

心房細動に対するクライオバルーンアブレーションの主要な合併症の一つに横隔神経障害が挙げられます。複合筋活動電位(compound motor action potential; CMAP)を用いた横隔膜活動電位のモニタリングにより、横隔神経障害を早期に検出することが可能です。しかし、一般的に使用されている体表面電極法では、患者の体格に応じた電極の位置調整が必要であること、CMAP波形と体表心電図QRS波の重なり、患者の体動や手術手技によるノイズ干渉などの課題があり、正確な測定が難しいという問題がありました。

それらの問題に対して我々の研究グループは、心内電位記録に使用される下大静脈挿入用電極カテーテルを用いた新たなCMAPモニタリング方法を考案しました。本方法では、大腿静脈に留置したシースを経由し、電極カテーテルを下大静脈から上大静脈まで一直線に配置します。そして、上大静脈に留置した電極カテーテル



の最遠位電極から右横隔神経ペーシングを行い、横隔膜下の下大静脈付近に位置する最近位電極でCMAPを記録します。この方法により、患者体格の影響を受けず、ノイズ成分を最小限に抑えた正確なCMAPモニタリングが可能となり、クライオバルーンアブレーション時の合併症低減に寄与すると考えられます。

本研究が、全国のカテーテルアブレーション業務に携わる臨床工学技士が集う学会で評価されたことを大変光栄に思います。今後も不整脈治療チームの一員として研鑽を積んでまいります。

最後に、日頃の臨床業務および本発表に関し、ご指導いただきました木村正臣准教授をはじめとする循環器内科の先生方、そして日々共に業務に携わる臨床工学部の皆様に深く感謝申し上げます。(臨床工学部 主任臨床工学技士 山本圭吾)

## マンモグラフィ装置の更新について

新たなマンモグラフィ装置が令和6年12月に導入されてから3か月が経過しました。新装置への移行に伴い、従来の2D撮影(CC・MLO)に加え、3Dマンモグラフィ(トモシンセシス)が撮影できるようになりました。トモシンセシスは乳房を様々な角度から立体的に撮影して、病変をより発見しやすくする検査法です。1mm程度にスライスした断層画像が得られるため、診断のしにくい石灰化や乳腺の重なりで隠れていた腫瘍を見つけやすくなります。

マンモグラフィは乳房を圧迫して撮影するため、痛みを感じる検査です。痛みを感じない方がおら

れる一方で「泣くほど痛かった」という患者さんもおられます。今回、撮影時の痛みを和らげることを目的に、マンモグラフィ圧迫自動減圧システム「なごむね」が導入されました。通常の圧迫方法よりも、最大圧迫となっている時間を軽減できる機能です。撮影技師も、これまでは痛みが短く済むようにとの配慮から、急いで撮影を行うことがありましたが、そういった心理的負担を減らすことが期待できます。また、更新に伴い立位が難しい患者さん用に診療用椅子「mammo pew」を導入しました。背もたれの前傾・後傾により、背中全体を支えながら適切な



Fujifilm社製マンモグラフィ装置 AMULET SOPHINITY



マンモグラフィ用椅子 mammo pew

座位のポジショニング(撮影体位や撮影角度の微調整)が確保出来ます。

当部門ではマンモグラフィを担当するスタッフ全員が、日本乳がん検診精度管理中央機構が認定している「検診マンモグラフィ撮影認定診療放射線技師」です。資格取得には単に知識を持っているだけでなく、正確なポジショニングや最適な撮影条件の設定など、実践的なスキルも問われます。今後とも検査依頼料の先生方のご支援を頂きながら、できるだけ患者さんにとって痛みが少なく、より安心な検査が受けられるよう、機器の整備ならびに人材育成に努めて参ります。引き続き何卒、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。(放射線部門 診療放射線技師長 成田将崇)

## 弘前大学医学部附属病院へのご寄附、心より御礼申し上げます

お名前のご掲載をご承諾いただいた方に限り、ここにご芳名を掲載させていただきます。今号では、令和6年11月から令和7年1月末までの間にご入金を確認させていただきました方を公表させていただきます。(経理調達課)

【さくら基金 寄附者ご芳名】

○奈良 光浩 様 匿名希望 6名

【診療科等 寄附者ご芳名】

○鈴木 秀和 様 ○森山 裕三 様 ○対馬 壽夫 様

○対馬 知穂 様 ○石澤 誠 様 匿名希望 1名

\*掲載の同意をいただいた方以外は、匿名希望とさせていただきます。

## 【編集後記】

南塘だより第117号をお届けします。ご執筆いただいた皆様、大変ありがとうございました。

今年の冬は例年になく豪雪となり、通院やお仕事に影響が出た方も多かったのではないのでしょうか。そんな厳しい寒さの中でも、患者様やご家族、そして地域の皆様のご理解とご協力のおかげで、病院としての活動を滞りなく続けることができたように思います。

3月下旬に編集後記を作成しておりますが、雪解けとともに、ようやく春の気配が感じられるようになってきました。木々のつぼみがふくらみ、あたたかな日差しが差し込むようになると、自然と心も軽やかになりますね。季節の変わり目は体調を崩しやすい時期でもありますので、どうぞご自愛ください。(病院広報委員会 委員 富田 哲)